

次代に繋ぐ百年の蓄積 —学園資料館に望むこと—

永野 貴子

1. はじめに

京都文教学園は、2004年に創立百周年を迎えた。その記念事業の一環として、『京都文教学園の百年』と題する学園史が発刊された。

編集に当たり、様々な資料等が収集され検討されたが、創学の理念に関する資料や百年の歩みそのものを具に提示する資料が、それぞれのキャンパスの園や学校で保存のみなされており、殆ど未整理のままであり、しかも資料の劣化が著しいのが実情であった。このうち小学校や大学はまだその歴史が浅く、データ保存の技術がデジタル化されてからの設置であったため、資料の劣化や散逸という点では難を逃れている。しかし、学園の基礎となった中・高等学校では百年前からの膨大な資料の劣化が激しく、中には散逸してしまい、その間の状況を読み取ることが出来ないという有り様であった。

もちろん、学園百年の歩みとしての学園史は刊行されたのであるが、それはこのような状況の中での読み取り作業の凝縮でしかなく、その背後には何万人という人々の学園に対する関わりがあり、それを示す夥しい資料があったればこそその結実である。

以上の歴史を踏まえると、当然、学園としてはこのような貴重な資料の整理保存の責務がある。そこで浮上したのが「学園資料館」の設立構想である。これからの百年を見据える時、何をその礎とするかが問われる。まさしくこの「学園資料館」設立構想は、今後の京都文教学

園の歩みそのものの基礎となるべき使命を担うものである。よって、学園ミュージアムを考えるにあたり、まずは百年の蓄積である資料をいかに整理保存できるようにするか、そしてそれをどのように次代に繋げていくかを提案しなければならないであろう。

2. 百年の蓄積として考えられる資料

ここで述べる資料とは、「百年の蓄積として」と銘打っていることから明らかなように、学園における「歴史資料」としての実物資料や文献資料、写真資料などが主である。

ところが、「自然と人間が生み出したあらゆるものが博物館資料になりえる可能性がある」（石森秀三著『博物館資料論』）という観点から考えれば、岡崎キャンパスや宇治キャンパス、城陽幼稚園のそれぞれの校地を取り巻く環境空間そのものも、資料たり得るといえる。いわんや、学園発祥の地である因幡薬師と大雲院も同様である。よって、このような環境空間の記録保存または伝承が必要となることはいうまでもないことであり、その方法も「学園資料館」の課題の一つといえよう。

また、芸術資料という側面から考えると、百周年に展示発表された「制服の変遷」や各種コンクールなどで発表された絵画・版画・写真・ビデオなどもその範疇に入れることができよう。

以上、百年の歩みの資料中、まずは歴史資料、特に中・高等学校の資料が現在どのような状況下にあるかを検証することとする。

3. 中・高等学校における資料の現状

A. 開創期（1904～16年）因幡薬師時代の資料

学園開創期の資料は、学園内に現存するものが少ないのが実情である。1904年1月25日に高等家政女学校の設立の計画が出され、その設立趣意書なるものは現存するが、同年2月9日に京都府より下りた学校設置の許可書は、京都府立総合歴史資料館の資料中に残るのみである。この他、開設当初の学則・教育目標・学科課程・校舎配置図・資金調達の内容書・校歌などは残されているが、保存状態が劣悪で早急の手当が必要である。

B. 漸進期（1916～33年）大雲院時代の資料

この時期の資料としては、学則変更の内容書・学科課程・校舎配置図・校務日誌など相当数残されているが、これも保存状態は悪く劣化が進んでいる。特にこの頃の資料として挙げられるものに、時々の記事や授業風景などを撮した写真が何枚か残っている。しかし、これらもご多分に漏れず、色あせて折り目などから破損の度合いが激しい。このようなものも早急に先端の技法で保存のための加工が必要である。

C. 基盤確立期（1930～45年）大島徹水時代の資料

まさしく第二次大戦直前から終戦までの激動の時代に、本学園の基盤が大島徹水校長により確立されたこの時期の資料は、学事年報・法人の理事会評議委員会会議録・財産目録・学校日誌・校務日誌そして岡崎の本館（京都府庁旧本館設計の一井九平技師による設計）建設に関する新聞報道記事など相当数残されている。しかし残念なことに、只々残っているだけという状況で劣化も進み、整理はおろか保管部署もまちまちで散逸のおそれがあることも否めない。

こうした現状ではあるが、かろうじて大島徹水校長の遺品に関しては、遺徳を偲ぶ同窓生の熱い思いにより残され、その目録が作成されている。その遺品から読み取れることは、校長の学術面での交流の広さと、後進への文化伝承に

対する崇高な志しである（この点については別途後述する）。この目録は現在、中・高の図書館に保管されているが、遺品そのものは保管場所が分かれており、なかには倉庫の片隅に押し込んだままというものもあり、やはり保存状態は悪く、墨跡・書籍なども風化を恣にしている。特に遺品中の富岡鉄斎筆『魚藍観音図』は、時々、国立博物館や鉄斎美術館への貸し出しもあり学園の誇るべき財産であるが、これもまた条件の良い状態では保存されていない。このような貴重な資料を今後、学園としていかに保管保存できるかという点では、全く保障がないのが事実である。だからこそ学園資料館の設立が急がれるのである。

D. 戦後学園発展期（1947～65年）五十周年時代の資料

戦後の新学制実施以降、財団法人から学校法人へと組織変更され経営基盤も安定したこの時期は、岡崎キャンパスの建築ラッシュ期でもある。当然、理事会評議委員会議事録や建築に関する資料は残されている。また、教務日誌や教育課程表なども残されているが、上期と同様に保管部署がそれぞれ異なる。やはり資料保存方法と保管責任部署のシステム化が早急に望まれる。この点でも、学園資料館の設立が急がれるのである。

この時期の重要な資料の一つに「五十周年回顧展」を収録したアルバムが挙げられる。まだ我が国が戦後の復興からようやく立ち直りつつある時期だけに、印刷物としては発行されておらず立派な装丁のアルバムが五十周年記念として作成された。このアルバムも上下一組のみで図書館の書庫に保管されており、貼り付けられてある写真などは劣化の進むままである。こうした資料的価値のあるものを、ただ大切に保管するということではなく、画像映像としてデータベース化することも保存の一策であろう。

また、五十周年記念として裏千家幽隱の席を模した茶室「徹心庵」が建築された。その扁額の文字は裏千家14代目宗匠淡々斎の直筆によるものである。（また、同宗匠は「喫茶去」とし

たためた一幅の軸も祝いとして学校に贈っている。)茶室前に造成された庭園と共に日本の伝統文化を学ぶ施設とされたこの茶室も、一井九平技師による岡崎本館と共に貴重な歴史的建築としての資料価値があるのではなかろうか。こういったものを包み込んだ学園資料館という考え方もできることから、資料館の建設場所をどこにするかを考える点で一つの方向性が見えて来るといえよう。

E. 六十周年以降(1965~2004年)総合学園時代の資料

五十周年には幼稚園が、六十周年には後の短期大学となる専修学部が、八十周年に向けて小学校が、九十周年には大学が設置され総合学園時代となったこの時期は、法人本部がそれぞれの要として設置認可等の資料を保管することとなった。また、校種毎に各校の資料を保存することが自然となり、これらの統合的な保管責任のシステム化が必要となった。この点から考えてみても、学園資料館の管理運営体制をいかに整備するかが問われることとなる。

F. その他の時期の資料

以上は、中・高等学校百年の歩みを各時期に分けて見た場合の資料の状況であるが、それぞれの時期を通した資料も存在する。

その第一に挙げられるものに、同窓誌『千久作』がある。第一号は1905年12月10日に創刊され、二号が翌年12月に発刊されている。(残念なことに、この二号は現存しない)以後、各年度ごとの学園と同窓会の状況を毎年詳しく伝えている冊子である。近年は冊子状にせず新聞の形態を取っているが、記念すべき年には冊子での発行となっている。この『千久作』も百周年を機にようやく複写製本(但し2部のみ)され、中・高の図書館と同窓会本部に保管された。

次に挙げられる資料として、中・高等学校の『家政新聞』がある。1949年7月25日の創刊であり、戦後の学制改革から今日に至るまでの、中・高等学校の日々刻々の有り様が記録された

貴重な資料である。1995年に校名が変更となり『京都文教新聞』と呼称は変えられたが、自身の資料的価値は同様である。これらの新聞も創刊当初のものなどは、触れると今にも崩れ飛び散りそうなくらい劣化していた。そこでこれらも百周年史の編纂を機に縮刷製本(20部)とし、CD-ROMでの資料保存も行うこととなった。

さらに挙げるとすれば、中学校の『パドマ』と高等学校の『菩提樹』であろう。双方とも一年間の生徒の活動を記録したものであり、行事・文化面での各種コンクール等の受賞状況・スポーツ面での各種大会記録を記している。ちなみに『パドマ』は創刊が1973年、『菩提樹』は1960年の創刊であり現在に至っている。これら2種の冊子は、それぞれ10年ごとに製本装丁され保存されている。

このように各冊子や新聞は、学園の歩みを知る上で不可欠な資料であり且つ保管状況がかるうじて良かったため、この度、これらを製本し保存することができたが、上記A~E時期の資料は、早急にその対処法を検討しなければならない。そのためにも学園資料館設立を実現させなくてはならない。

~遺品から読みとれる大島徹水校長の学術面での交流と文化伝承の志し~

「大島徹水校長遺品目録」に見られるように、大島徹水には幅広い学術面での人的交流があった。例えば歴史学者の内藤湖南、哲学者の西田直二郎、画家の富岡鉄斎などがそれである。

特に内藤湖南と西田直二郎とは昵懇の間柄であったという。それは「大蔵会」(大正3年から開催され現在に至っている)を始めるべく、大島は京都大学にいた彼らと共に発起人として何度も話し合いを重ねたことでも知られている。「大蔵会」とは、佛教関係の各宗学校が集う「東洋学」の研究会のことで、歴史・哲学・宗教をはじめ東洋におけるあらゆる分野での学問研究の場である。当時、京都大学・大谷大学・佛教大学(現在の龍谷大学)などから、貴

重な典籍・木版・版画・写経が東洋学の研究資料として提出されたという。いうまでもなく大島徹水はその中心人物の一人であり、その結果、家政高等女学校が第3回・第4回の開催校となり、その後7度にわたりこの学問研究の場となった。大島はまた貴重な典籍や木版・写経などの研究資料も有していた。しかし、残念なことにかんりの物が今では散逸してしまっている。かろうじて残された物が目録中に記されている。

(ちなみに、2005年10月15日、京都文教大学・短期大学で第90回「大蔵会」が開催されたことも大島徹水校長の縁を感じざるを得ない。)

また、文化伝承の志しという側面から大島徹水校長の遺品を見れば、交流のあった画家富岡鉄斎の作品や竹内栖鳳・武藤幽芳・東郷平八郎らの作品が残されており、後進への情操教育に寄与するところ大なるものがある。

これらの蔵品の内、宗教的・芸術的・歴史的に価値の高い物もあるにもかかわらず、ただ残されているという状態の域を出ない保管と保存環境にあるところから、急ぎ本格的な整理や保管と保存に着手しなければならないであろう。

4. 資料の現況から見られる課題（資料の整理・保管・保存）

学園資料館設立構想が上がっている今だからこそ、中・高等学校をはじめとする学園における百年の歩みを語る資料の現状を踏まえ、実際の資料の整理・保管・保存を検討しなければならない。

①資料の整理

第一にしなければならないこと。それは資料の確認であろう。前述した資料類は、学園百年史を編纂するに当たって必要とした一部の資料に過ぎない。しかも中・高等学校に関する資料のみである。学園資料館となれば、幼稚園から大学さらに法人までそれぞれの所に何がどれだけあるのか、という確認から始めなければならない。

次にしなければならないこと。この作業が一番時間と労力を費やすこととなる。それが分類である。夥しい数の書類や書籍などの文献、写真やフィルム、遺品や遺墨、等々を一点一点付箋を貼ることから始めるしかない。それを年代別または内容別に分類することが、さらに困難を要する作業となる。そこで付箋に年代と内容と現在の保管部署を併記し、コンピュータ入力による分類をすることが必要となる。(最初から一点一点を順次コンピュータ入力してもよいが、資料自体に付箋という“顔”がないので、後の作業が繁雑となるおそれがある)このような作業を、学園全ての資料について行わなければならない。

②資料の保管

分類作業の後でようやく資料館に収めるべき資料か、そうでない資料かを選別し、そうでない資料は、元の部署にて保管することとなる。

資料館に収める資料が決まれば、そこでまた分類する必要が生じるであろう。それは現状のまま保管することが望ましいものと、補修やデジタル化が必要なものとの分類である。当然、補修作業やデジタル化の作業のための時間や労力は避けられない。こうしてようやく配架の作業に入る。ここでまた何を何処に配架したかも、コンピュータ入力しなければならないし、目録作成も行わなければならない。

ここで忘れてはならないことは、どのような書架や器具が必要かを資料に合わせて考えておくことである。つまり、今までの蓄積を次代に繋ぐための保存環境を設定する前段階としての作業となる。

③資料の保存

すでに述べたように、本学園(中・高等学校)の資料は、劣化が進み損傷も激しいものが多い。今までの百年の蓄積をこれからの百年、二百年に向けてどのように保存していくかが大きな課題である。まして学園資料館ともなれば、その目的の第一としてこの課題を解決しなければならない。本格的な保存環境としての設

備を整えるべく、本腰を入れて臨まねばならないであろう。

資料の大半は文献を中心とした紙類であり、この他に写真類・フィルム・絵画・墨跡・衣類など保存設備の面で条件がそれほど大きく異なるものではない。したがって、次に挙げる条件が最低限度満たされる設備を整えたいものである。

まずは、温湿度が調整管理できることと、防虫対策が必要不可欠の条件である。特に、開創期・漸進期・基盤確立期（明治・大正・昭和前期）の資料にとっては、資料館の建設を待つまでもなくこの条件下に保管しなければならない状態である。もし、その完成を待たねばならないのであれば、せめて今ある資料を燻蒸処理し、デジタル技術による保存を行うことが急務である。そのためには時間と費用をかけねばなるまい。一時を争うところまで来ているのである。

次に必要な条件は、災害に対する備えである。たとえ立派な資料館を建設しても、地震や火災などで資料が損傷したり焼失したりすれば元も子もない。それでなくとも、長年の間に本来あるべき資料が散逸し、百年史編纂の折りには随分口惜しい状況であった。だからこの際は是非とも、免震・耐火の建築設計による保存が望まれる。

さらに、茶室「徹心庵」や岡崎本館（現一号館）を歴史的建築と見るならば、これを後世に保存するために、大気汚染や酸性雨から守っていかねばならない。そのための対策も講じなくてはならない。

このように保存環境を整えるということは、膨大な時間とお金と労力がかかることになるが、歴史を有するという事実と誇りには代えられない責務である。

④管理体制の構築

本学園は、岡崎キャンパスと宇治キャンパスそして城陽に幼稚園と、組織が分散している。学園資料館ともなれば、そこに収蔵する資料は中・高等学校のみならず学園全体の資料が対象

となる。そうすると、資料館に常駐する学芸員有資格者だけではなく、学園組織の一部に、各校一名以上のスタッフで構成される部署を置くことが求められる。

このためには予算と時間とスタッフが必要となるが、こうした管理体制を整えることは、単なる管理だけではなく、展示計画や資料館の活用方法などを検討し実行していく活動の要としての役割を果たすことにもつながる。それはさらに学園内交流の原動力にもなるのではなからうか。

5. どのような学園資料館にするか

本学園（中・高等学校）の資料の状況は前述の通りであり、他の学園のそれと比すれば、量・内容共に薄く軽いかもしれない。しかし、中興の祖である大島徹水校長の教学に対する遺産は、他の比ではない。そして百年の歴史を有するという点では、本学園にとってあらゆる資料が意義深く貴重なものばかりである。「歴史を明解にすることが将来を創る」とするならば、これらを次代にいかに繋いでいくかが本学園の未来を占うことにもなる。

この点を踏まえながら、どのような学園資料館にするかを考えていきたい。

「歴史を明解にすることは、将来を創ること」 ～根源を振り返る拠点～

文献資料を精読し解釈することにより歴史を明解にするという作業は、『京都文教学園の百年』の刊行で、ある程度その実を得たといえよう。しかし最初にも述べたように、これは読み取り作業の凝縮でしかない。それをさらに身近な歴史として、またその大なる歴史の一コマに今存在していることを実感するためにも、資料館は学園の根源を振り返る拠点とならなければならない。さて如何にすればよいか。その方法を一つ二つ提案したい。

①ジオラマで伝える建学の精神

『京都文教学園の百年』は刊行物であり、読

むということが前提で存在意義が生じる。もし読まなければ、そこからは何も見えてこないし、伝えられ吸収されるものは無いに等しい。しかし、百年の歴史に脈々と受け継がれている建学の精神がその中に記されていることは事実であり、何か一つでも形として表現し臨場感を持って体験することが出来ないか、という思いを編纂作業中に強くした。

そこで注目したものに、開学当初より実施され現在に至っている「入学式」・「卒業式」での仏前法要のジオラマ化である。特に学園資料館で展示するとなれば、幼稚園・小学校・中学校・高等学校・短期大学・大学それぞれの各時期の式次第に準じ、制服の変遷に合わせ、時代の様相を映し出すような設定にするのがよいのではなからうか。そうすればその時々 of 校舎（式典会場）も再現され、制服も再現され、校章等の移り変わりも見ることが出来る。そうすれば建学の精神に支えられた総合学園としての姿を明確に感じ取ることが出来るのではなからうか。

②大島徹水ビブリオグラフィー

もう一つの提案として、大島徹水のビブリオグラフィーを作成することを挙げたい。これは前述の大島徹水校長の遺品目録を中心に、自身の著作はいうまでもなく大島徹水校長を知る人が記した著作や講演記録など含め、その生涯を一覧として紹介することにより、将来の学園の在り方の指針とするものである。

核としての学園の拠り所

以上のように、学園資料館が歴史を解明する拠点となり、建学の精神を振り返る拠点となれば、おのずとこの資料館自体が学園の核としての存在意義を持つこととなる。このことから、学園資料館はやはり岡崎の地に設置されるのが本来であろう。諸条件が許すならば、宇治キャンパスにも学園資料館二号館を設置し、岡崎を本館とすることも考えられる。しかし、まずは本館の設立であろう。これから十年後、二十年後、いや五十年後、百年後にこれらを残し伝え

ることは、現在の我々の責任であり義務である。もちろんその間、さらなる宝を積み重ね、未来を担う若者に寄与するものを収集し、それを彼らに託さねばならない。そのためにも学園資料館の設立構想が早期に実現することを願ってやまない。

(付記) 本稿は、京都文教大学人間学研究所共同プロジェクト「学園ミュージアムを考える」(研究代表者：上田富士子・中村博幸)における2005年10月27日の研究会において発表した内容を基にしている。上記研究会の席上では学園資料館創設に関する研究会諸氏からの多くのご意見を賜り、記して感謝申し上げます。

参考文献

- 伊藤唯真 他 『京都文教学園の百年』 ぎょうせい 2004年
石森秀三 『博物館資料論』 放送大学教育振興会 2000年